

ある時 はじめて

— 目次 —

※

ある時 はじめて

秩序ある世界

美しき映像

つないだ手

みじかい質問

鍵を磨く

花

待つということ

うつろい

たたく

落ちる

営む

厨房にて歳晩

※※

オレンジ色の少女

見えない住人

遊覧船

焼かれた男—糸杉の画家—

※※※

コアジサシとのつべらぼう

200X年の渴き

ガリヴァー仰臥録

日本の夏

毒のりんご

わたしは知らない

三半規管黙想

ある時 はじめて

ある時 はじめて
轍がつけられる

洞窟の壁に絵が描かれ
土器に文様がつけられ

収穫の祭りの音楽が奏でられ
結婚を祝う歌が唄われ

口伝えの物語りは文字に代わり
綴られた言葉は印刷され

きらめく星々は星座になり
太陽と月から暦が導かれ

そして いま

粘着質の海にとどまるのは 舩

古い教会にかけられた

テンペラ画に見入る

コンサート会場で

交響曲を聴く

またロケットが宇宙に飛び立つという

ニュースを聞く

人気作家の単行本を

書店で買い求める

作った楽曲を

ライヴハウスで発表する

美術館に収められた

点描の風景画を眺める

伝説と神話を織り交ぜた物語りの

映画上映の列に並ぶ

来年の運勢を

星占いで調べる

インスタレーション作品の

展示会場に足を運ぶ

為されていないことなど

何ひとつないようだ

これから生み出されるものなど

何ひとつないようだ

轍は ついては消えていく

酸素の薄い砂丘で 砂煙が立ちのぼる

だが

轍は 告げている

はじめて為しとげられた 新しいことが

いつも あったことを

砂に密やかにつけられた

深い痕跡の

隠しようのないことを

みじかい質問

大事な質問は

いつも みじかい

「それは なぜ」

「どうして そうなるのか」

うまい答えさえ見つければ

森羅万象は 手のうちに還ってくる

だが 答えをたしかめたがる

子供らのうしろには

たしかめる方法を教えるすべを持たず
手をこまねいている大人たちと

たしかめようとしなのまま

大人と呼ばれるものになってしまった
子供たちがいる

花

タンポポ

種でいるあいだ

風に乗って

どこまでも 旅をする

根をはって

花になったら 動けない

にんげん

子宮にいるあいだ

かまえている

大気のなかに出たとたん

手足をばたばた

生きているあいだ じたばた

タンポポは

根っこで地球と交信するが

にんげんは

いつまでも根づかないので

地球はときどき

宇宙に

切ないパルスを

送ってみたりする

営む

初夏の海

遠く近く 波音は絶え間なく
ぬるい水は くりかえし足首に訪れる

海は 倦むことなく

砂粒を浜に吐き出しては

また呑み込みつづける

なんのための営みだろう

なにも変わらないだろうに

足元に寄せる波に

踵からさらわれる と思うと

かならず 置き去りにされている

そして 頼りなげに波に揉まれながら

砂はしたたかに

帰る場所に向かって動いている

あたり前の顔をして

扉を開けて出ていく人のようだ

説明を求めるのは おろかな癖

答えは 営みに加われるか否か

ただ それだけのこと

見えない住人

扉のかんぬきを差す重い音が
遠くで響いた

顔をみあわせた四人は途端に走りだし
扉の内側を 懸命にたたく
夕暮れの教会にいた二組の観光客は
閉じ込められかけたのだった

フランス中部にある町の
中心部から離れたロマネスク様式の教会で

走りだしてから 扉の係の人が気づくまでの
ほんのみじかい時間
おそらく四人とも 同じように
長いときを走っていた

四人の影法師が暗闇を呼び込んで
追いかけてきていた

神の御座す教会なのに恐ろしかったのは
信心がないせいではない
目に見えぬ存在の鼓動が
内陣から たしかに追いかけてきたのだった

暗闇どころか光のなかにさえ

ワルモノもヨキモノも 一緒に生きている

神も悪魔も

鬼も妖怪も

闇や光のではなく

実に 有史以前から人の伴侶である

可視できないその住処すみかは

人のなかにある 闇と光

さわれもしない存在を

人は敬い 畏れる

神も悪魔も 見えないが故に

鬼も妖怪も 見えないが故に

人のなかに住んでいるが故に

遊覧船

セーヌ河の遊覧船は

夏の河岸を照らしながらすべっていた

光る衣をまとうように

照明灯が船体を囲んでいる

素肌をよせあい 水辺に坐る恋人たちは

ライトが作るスクリーンで演技し

船のなかの恋人たちも

疵のついた硬いベンチで素肌をよせあう

地方なまりのある

若い男女も 船内で肩を抱き合う

男は 窓際に坐る女を見つめながらささやき

女は 流れゆく景色に心をうばわれている

女は

歴史的建造物が光に浮かび上がるときだけ

うれしげに声をあげ 指さして

男にふりむく

男は

儀式のように明るい方角を一瞥するが

すぐさま女に視線を戻しては

さらに肩を抱き寄せ ささやき始める

女は 光のショーに気をとられている

男が掻き口説いても 顔を近づけても

ノートル・ダム大聖堂に エッフェル塔に そして

船に揺られていることに 釘付けのまま

男は 汗を拭ってぼんやり見る

湿った黒い川面を ときが併走してゆくのを

湿った自分たちに にじんで跳ね返る光を

湿った女の 乾いたくちびるを

男のまなざしは

空いている手に持ったガイドブックの

写真入りの記述を再確認するためだけに

汚れた窓を這っている

200X年の渴き

今日は やけに天気がよかったんだ
ママの機嫌もよくて

ひさしぶりに 公園の散歩につれていかれたよ

ママはぼくを見ながら よく ためいきをつく

「大きな体は同じなのに、

なぜ中身はこんなに違うのかしら」って

ぼくの前にいた ぼくとそっくりの犬を

ママは忘れてない

その犬とぼくを いつも くらべるんだ

えさを食べながら まわりに散らかしたり

ちいさな子の顔を舐めまわして泣かしちゃったとき

ママはいつも おもいきり ぼくを叩いた

ぼく まだ二歳だけど 病院に行っただけ

わからないのは ママが漏らす言葉

「新しいのに、おかしいわね・・・」

ママは なにが気にいらないんだろう

ぼくは どうすればいいのかな

前の犬は もどってはこないよ

ぼく まだ二歳なのに 薬ばかり飲んでる

病院はいやなことばかり 思わず

お医者さんの手を噛んで またママに叩かれた

今日 ママがベンチでつぶやいてた

ぼくは ほんとうの ぼくじゃないんだって
クローンペット、ってさ、知ってる？

「同じはずなのに、あの子とはぜんぜん違うわ。
生まれ変わりが欲しかったのに

どうしてこの子は、こんななの？」

ぼくは 「前の犬」なのかな

ぼくは 苦しんで死んだのかな

診察台って 痛いところなんだよ

ぼくは たぶんママのこと好きだったんだね

だからきつと 痛いのがまんしたんだね

それから ママにさよならしたんだね

ねえ ぼく もう一度死ななくちゃならないの？

「ああ、またこの子は唸ったりして！

あの子は絶対にそんなことしなかったのに」

あの子って ぼくじゃないか

ぼく ほんとはママのこと好きじゃない

だからやっぱり あの子 とはちがうんだ

ぼく きつと逃げるよ

どうせまた死ぬなら ママのいないところがいいな

今日は やけに天気がよかったんだ

やけに湿気もなくてさ

ノドガ 渴イタナ

ガリヴァー仰臥録

「まったく、見ているだけで窮屈だ。

子供の頃、纏足てんそくなんて風習はここには無かったんだ。

俺は金輪際、やらないぞ」

と 老境にさしかかった小さな男がこぼす

「そうですか？ ぼくは生まれたときから纏足なので

特にはなにも感じませんけど。まわりにも大勢いますし、

慣れば具合のいいものだと思いますが」

と はるかに若い小さな男は 敬遠ぎみに答えた

アジアの東方海上 弓形に横たわるのは

からだ中 きつく包帯を巻いたガリヴァー

ガリヴァーから生まれた小人たちの軍靴が

そこで雄叫びをあげていたのは 六十年前のこと

雄叫びと軍靴の音が静まった時ガリヴァーは 瀕死の状態

太平洋を渡ってはるばるお越しの医者たちは

チョコレートと煙草と銃と戦車が手土産で

舶来もの好きのガリヴァーは大歓迎

「背骨が歪んでるし、腰の骨も飛び出てますね」

「肩の筋肉が突っ張ってます。隣の人たちを

ひどく叩いた時の状態で固まったようですよ」

「右足も、蹴り出した形で腐りかけてますな」

「診察の結果、病巣がかなり深いとわかりました。

今すぐ、全て手術しなければなりません」

ガリヴァーは答える

「ええ、ええ、どうぞよしなに」

すぐさま外科手術が施され

緋色のデイゴが散り果てた 外反母趾の左足にいたっては
骨を削られ 包帯を巻かれたまま

二十七年もの経過観察を余儀なくされた

さて 包帯がとれたにもかかわらず ガリヴァーは心配性

また変形しては困るからと 自分からグルグル

足はおろか 手にも頭にも新たな包帯を巻きつけた

病変の原因まで究明せずに巻いてしまった それは大事に

住み着く小人たちにも 包帯巻くのが大はやり

見せかけだけでもからだを窄^{すぼ}めて「纏足」状態

そうしておけば 医者のお墨付きをもらったように

なぜだか無性に安心するという

明らかに病気とわかる小人も 確信に満ちて断言する

「健康診断？ 必要ないね、纏足してるんだから」

蒸れた包帯の下 病が内攻していようが

なぜだか無性に安心なのだという

いまや 手術のことさえ知らない

たくさんの小人たちが歩き回っている

包帯を巻いた 小さな小さな足で

看過した病根を覆い隠した ガリヴァーの包帯の上を

「赤ん坊に包帯を巻くつもりなら、

手垢がまだつかない、産湯からが最適です」と 声がする

昔の小人たちは 「纏足」ではなく

草履や下駄を履いていたのだが

ガリヴァーの上で

蹴鞠なんか やっていたのだが

毒のりんご

喫茶店に集う若い母親らの会話

「こどものうちから悲しい話とか救いのない話を

読ませるのは、ちょっと考えものよね」

その横でこどもらは 両の手のひらに収まる

ゲーム機の音をたてている

出版社のロビーで聞こえる会話

「やっぱりね、こどもの本はめでたしめでたし、で

終わるほうがうまくいくんですよ」

物語が始まってもない内から

終わらせ方が決まっているとは

こどものこころとは

それほどまでに脆いのか

伸ばしては縮み

縮んでは伸びる

柔らかな鋼 ではなかったか？

絶望のあるを知ったなら希望を失い

無償の行ないをばかにして

見返りだけを求めるようになるのか

こどものたましいには

義憤の芽がかくされてはいないのか？

柔らかすぎるクッションの上から

おとなのやり方を横目で見つつ

こどもは育っていく
わずかな毒を飲まないかわりに
毒のまわった真綿でしめつけられて

くすりも毒も 元はおなじ
魔法使いの 煮えたぎる大釜から
湯気をたてて取り出された

熱々の 知恵のりんご
こどもはりんごをかじりたがる

与えてやらないのは おとなが
やけどをしそうだから？

わたしは知らない

わたしは知らない

今 地球の裏側で起きていることを

それどころか

今 重い玄関の戸ひとつ隔てたむこうで何が起きても
知ることがないかもしれない

わたしは誰だ という自問にさえ

おそらくは答えられないというのに

アナウンサーが読む原稿

新聞の紙面

雑誌の見出し

十メートル先は霧にかくれていても

何かを知ったつもりにさせてくれるものは溢れている

わたしは知らなかった

エトナ山が噴火した瞬間を

パレスチナの村で男たちが射殺された瞬間を

古く美しい町が洪水に呑み込まれた瞬間を

貧しい村から少女が買われていた瞬間を

もし その瞬間を知っていたからといって

おそらく わたしの生活に

さほどの変化はなかった

だが 知った時の

いたたまれなさはどうだろう

そして 思い知らされる

さほどの変化はない という居心地の悪さは

いったい 何だ

知らずにいることの頼りなさ

それは

知ること埋められるのか

そんなことすら わたしは

知らない